

# 諏訪洞砦跡

1993

岐阜県土木部

財団法人 岐阜県文化財保護センター

## 序

国府町は飛騨の中心部に位置し、緑豊かな山々に囲まれ、恵みをもたらす清き流れの宮川や荒城川が貫いています。また、風光明媚なこの地は、縄文・弥生の遺跡をはじめ、古墳や古代寺院など、原始・古代からの遺跡が多いことでも知られています。そして、中世には、幾多の戦乱がこの地で繰り広げられました。

このたび、県単道路改良工事（谷高山線）に伴い、記録保存をはかるため諏訪洞砦跡の発掘調査を実施しました。発掘調査は、岐阜県土木部古川土木事務所から岐阜県教育委員会に委託され、財團法人岐阜県文化財保護センターが担当しました。

諏訪洞砦跡は、中世の広瀬氏の砦跡と推定されてきた遺跡です。今■の発掘調査では、残念ながら、砦としての機能を確認する遺構や、砦の時期や性格を決定づける遺物の出土を見ることはできませんでした。しかし、曲輪的遺構や石列遺構・配石遺構などが検出され、砦があった可能性が確認されました。また、縄文時代の土器片や、打製石斧が出土し、予想しなかった歴史のひとこまをかいま見ることもできました。

最後になりましたが、発掘調査および報告書の作成にあたってご協力いただいた関係諸機関並びに地元の関係各位の皆様には厚くお礼申し上げます。

平成6年3月

財團法人 岐阜県文化財保護センター

理事長 吉田 豊

## 例　　言

1. 本書は、岐阜県吉城郡国府町名張字諏訪洞に所在する諏訪洞砦跡の発掘調査報告書である。
2. 本調査は、県単道路改良工事（谷高山線）に伴うもので、岐阜県土木部古川土木事務所から岐阜県教育委員会を通じて委託を受け、財團法人岐阜県文化財保護センターが実施した。
3. 発掘調査は平成5年度に実施し、野村宗作と上嶋善治が担当した。
4. 本書に記載した遺物の実測は上嶋善治が行った。
5. 実測図等のトレースは次の者が行った。

政井美子 坊田洋子 屋上満智子 田中春美 田邊直子 辻千恵子 中屋寿賀子  
松葉弘子 辻垣内ひとみ 古川恵利子 新田香代子
6. 遺物写真の撮影は野村宗作が行った。
7. 本書の執筆は、第1章第1節は、揖斐郡藤橋村立藤橋中学校教諭古田靖志氏に玉稿を頂き、その他は、上嶋善治が担当した。編集は上嶋善治が行った。
8. 事前地形測量および発掘後の地形測量は株式会社イビソクに委託して行った。
9. 発掘調査および報告書作成にあたって、次の方々や諸機関からご助言・ご指導・ご協力をいただいた。記して感謝の意を表する次第である。（敬称略）

町川克己・菅田一衛・岩花秀明・宇野隆夫  
岐阜県土木部古川土木事務所・国府町・飛騨県事務所・飛騨教育事務所  
株式会社イビソク
10. 発掘調査作業ならびに調査記録および出土品の整理等には次の方々の参加・協力を得た。

古田辰三 西谷富安 豊倉一男 青山時造 今垣道春 宮下四十二 稲本嗣 田中靖久  
袖原末三 野村新三 古田奈緒子 伊藤世志光 白石和代 加藤清左衛門 古田和久  
坊田洋子 田邊直子 屋上満智子 辻千恵子 中屋寿賀子 松葉弘子 辻垣内ひとみ  
田中春美 古川恵利子 新田香代子
11. 調査記録および出土品は、財團法人岐阜県文化財保護センターで保管している。

# 目 次

序

例 言

第1章 遺跡の立地と歴史的環境 .....	1
第1節 地形および地質 .....	1
第2節 歴史的環境 .....	3
第2章 発掘調査の経過 .....	11
第1節 調査の方法 .....	11
第2節 発掘調査の経過 .....	14
第3章 遺構 .....	15
第1節 基本的層序 .....	15
第2節 遺構 .....	15
第4章 遺物 .....	21
第1節 土器 .....	21
第2節 石器 .....	22
第5章 まとめ .....	25

## 挿図目次

第1図 遺跡の位置	2
第2図 周辺の城跡	5
第3図 瓢訪洞砦跡調査地区設定図	12
第4図 発掘調査前地形図	13
第5図 トレンチ北壁土層図	16
第6図 C区北壁土層図	17
第7図 遺構図	18
第8図 発掘後地形図	19
第9図 出土土器	21
第10図 出土石器	23

## 付表目次

第1表 周辺の城跡	6
第2表 縄文土器観察表	22
第3表 打製石斧一覧表	24

## 図版目次

図版1	1. 遺跡遠景 2. 発掘前の状況
図版2	1. 遺跡からの眺望（南東、広瀬城を望む） 2. 遺跡からの眺望（北、古川方面）
図版3	1. 遺跡からの眺望（東方） 2. トレンチ 3. 作業風景
図版4	1. トレンチ北壁 2. C区北壁
図版5	1. 石列遺構（上から） 2. 石列遺構（北から）
図版6	1. 配石遺構（南から） 3. 配石遺構（上から）
図版7	1. 発掘後の状況（遠景） 2. 発掘後の状況（南から）
図版8	1. 発掘後の状況（北西から） 2. 土器
図版9	1. 石器（1） 2. 石器（2）

## 第1章 遺跡の立地と歴史的環境

### 第1節 地形および地質

遺跡の所在する吉城郡国府町付近の地形は、宮川や荒城川流域に広がる谷底平野の平坦面と、それを取り巻く標高700～1000mの山地とからなる。宮川は国府町の中央部を北西方向に流路を取り、古川町付近までは大きく曲流することもなく、標高差の少ない平坦面をゆるやかに流下している。また、荒城川は国府町市街地付近までは東西方向に流路を取り、その後は宮川と平行に流下し、古川町市街地付近で宮川に合流する。これら両河川の流路は、地下に伏在する断層の走向に一致している。

河川の流路に広がる谷底平野は、第四紀完新世に礫や砂・泥などが堆積した沖積層からなり、基盤の船津花崗岩類や濃飛流紋岩類、手取層などを被覆している。また、国府町周縁の山地部の地質は、中生代ジュラ紀の船津花崗岩類、ジュラ紀～白亜紀の手取層群、白亜紀後期の濃飛流紋岩などからなる。山が平野にさしかかる辺りで局所的に更新世の堆積物が分布している。

宮川の谷底平野を取り巻くように分布する船津花崗岩類は中生代ジュラ紀に大規模に貫入してできた岩体で、広瀬花崗岩と命名されており、さらに船津タイプと下之本タイプに区分されている。宮川流域には、下之本タイプの花崗閃緑岩が、荒城川流域には船津タイプのアダメロ岩や斑状花崗閃緑岩がそれぞれ分布している。

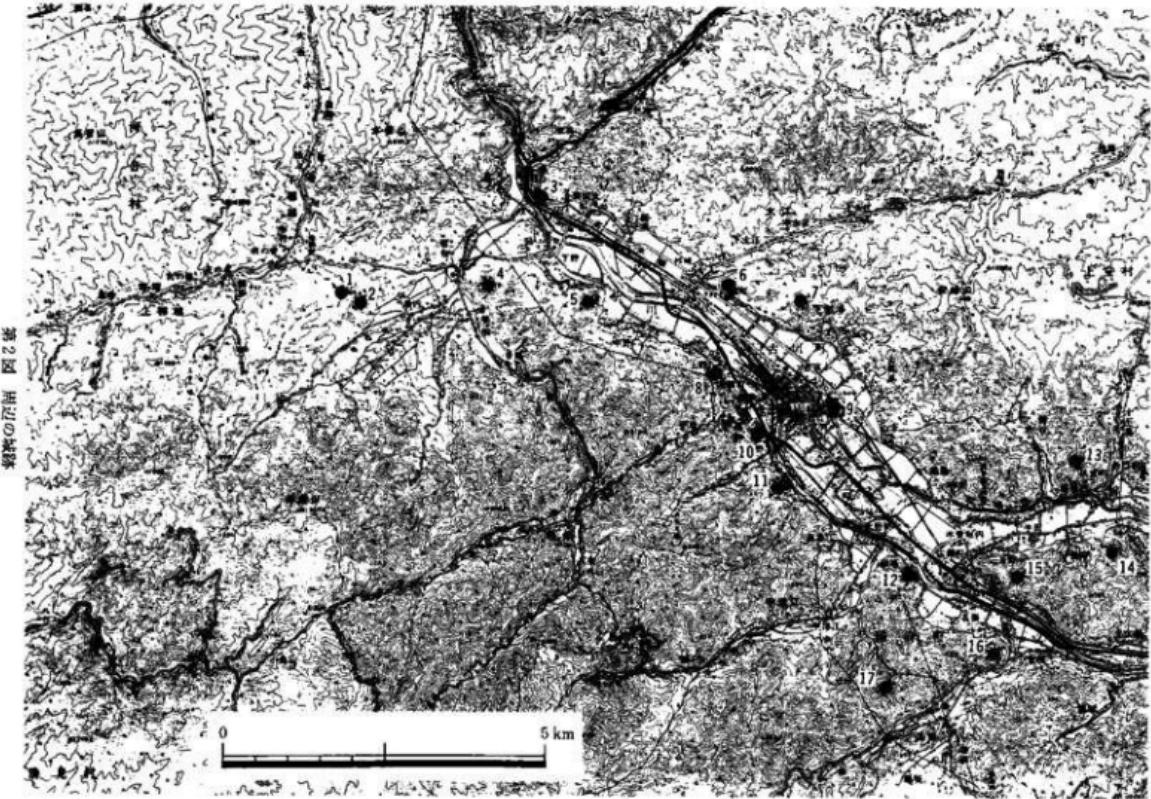
宮川の西方に広く分布する濃飛流紋岩類は、白亜紀後期の火山活動による火碎流堆積物を主体とした大規模な岩体の北縁部にあたり、流紋デイサイト～流紋岩溶結凝灰岩からなる。濃飛流紋岩の岩体中には花崗岩斑岩の貫入が見られる。

手取層群は国府町市街地の北方の荒城川右岸周縁に分布しており、古川累層と命名されている。疊岩、砂岩および頁岩からなる。

諏訪洞砦跡、宮川流域の平坦面にさしかかる標高727.1mの大平山の北東山麓斜面上にある。眼下には宮川が流れ、対岸の国府町市街地を一望することができる。大平山は全体が前述した船津花崗岩類の広瀬花崗岩からなり、下之本タイプに区分される花崗閃緑岩の山となっている。この大平山の北東側の山麓は急斜面となっており、遺跡は花崗閃緑岩体や更新世堆積物を被覆している崖錐性堆積物上に立地している。

崖錐性堆積物は径10cm～30cmの花崗閃緑岩の角礫やマサを多量に含む黒色土からなっている。地表付近の構成層も同じような黒色土からなるが、マサや角礫が非常に少なくなっていることや、径1cm～5cmの砂岩の亜円礫を含むことなどから崖錐性堆積物と区別することができる。このことは、遺跡が崖錐性堆積物の斜面上に盛り土をして作られた可能性を示唆している。

2 第1節 地形および地質



第2図 周辺の城跡

## 第2節 歴史的環境

吉城郡国府町名張地内に所在する諏訪洞砦跡は、宮川の左岸、山麓の末端部に位置する。宮川は国府・古川盆地にはいると西方に流れを寄せている。この砦跡は、ちょうど山と川に挟まれた自然の要害の地に立地している。また、眺望が素晴らしく、国府市街地から、荒城地区、古川町方面までを一望に見渡すことができる。

中世に広瀬郷（現在の吉城郡国府町の中心部）を支配していた広瀬氏は、天文年間（1532～1554）に広瀬の山崎城から瓜巣に高堂城を築いて移った。しかし、険しい地形に立地して不便なため、さらに広瀬城（田中城）を築造し家臣団や城主の居城として移ったと考えられている。広瀬城は平山城の形式で飛騨では有数の繩張りの広さをもつ。城下と推定される名張の地は、北東側は宮川に、南東部は山麓に囲まれた所であり、もし仮に諏訪洞砦が存在したならば、城下の北西の口を固める機能を果たすことになる。

ここでは、現在の国府町を中心とした地域の中世の状況を概観し、国府町から古川町に点在する城跡についても概要を整理する。なお、卷末に引用・参考文献をまとめておく。

鎌倉幕府が成立し、建久4年（1193）に、衆人多好方が荒城郷の地頭職に補任されている。正治元年（1199）には、息子の好節に伝領された。荒城神社に伝えられる鉦打や獅子舞は好方が伝えたものであるとか、荒城神社に伝わる獅子頭・面・古鼓胴なども多氏ゆかりのものとの伝説もあるが、いずれも定かではない。なお、荒城神社の創建時は不明であるが、『延喜式』にその名がすでに見られる。また、県の重要文化財に指定されている神社本殿は、1390年に再建されたものであることがわかっている。

南北朝期に入ると、南朝方の国司の姉小路家綱は小島城（吉城郡古川町）に居を構えたとされる。北朝方の守護の京極氏は、飛騨のみではなく出雲・隠岐の守護も兼務しており、守護代として多賀氏・高山氏・三木氏を派遣したが、いずれも飛騨南部に勢力があった。広瀬氏は、広瀬郷（武安郷）を中心に勢力を広げていた。「広瀬郷」と必ずしも一致しないかもしれないが、「広瀬莊」の名が、寛元3年（1245）の文書に出てくる。広瀬氏は、南朝方についていた。

全国に安国寺が建てられるようになると、飛騨においても、1357年にこの国府町の地に建立されることになった。さらに1408年には、八角輪藏を有する経蔵が作られた。この建物は現存し、飛騨では唯一の国宝となっている。

1371年に、姉小路家綱は、弟の尹綱とともに越中の桃井直常を助け、越中の守護斯波義将の兵と戦ったが破れた（建徳二年の役）。さらに1379年、三代將軍義満は、広瀬之宗が南朝方にについていることを理由に、広瀬氏の領地を没収して、山城國の醍醐理性院へ祈祷料所として預

#### 4 第2節 歴史的環境

けた。その後、明徳年間の美濃の乱で、広瀬宗勝が守護京極高秀に属して軍功をあげたので、広瀬郷は、再び広瀬氏のものとなった。

応永18年（1411）に、国司となっていた姉小路尹綱が後龜山法皇の勅命を受けて小島城に兵を挙げ、広瀬常登入道もこれに味方した。幕府側は、飛騨守護であった近江の京極高光に討伐を命じ、その弟の京極高数が越前の斯波氏や信濃の小笠原氏の協力を得て、小島城と向小島城（吉城郡古川町）を攻め落として尹綱や常登入道を滅ぼした。この時、常登入道の子である美作守は幕府側についたので、広瀬郷は安堵された。

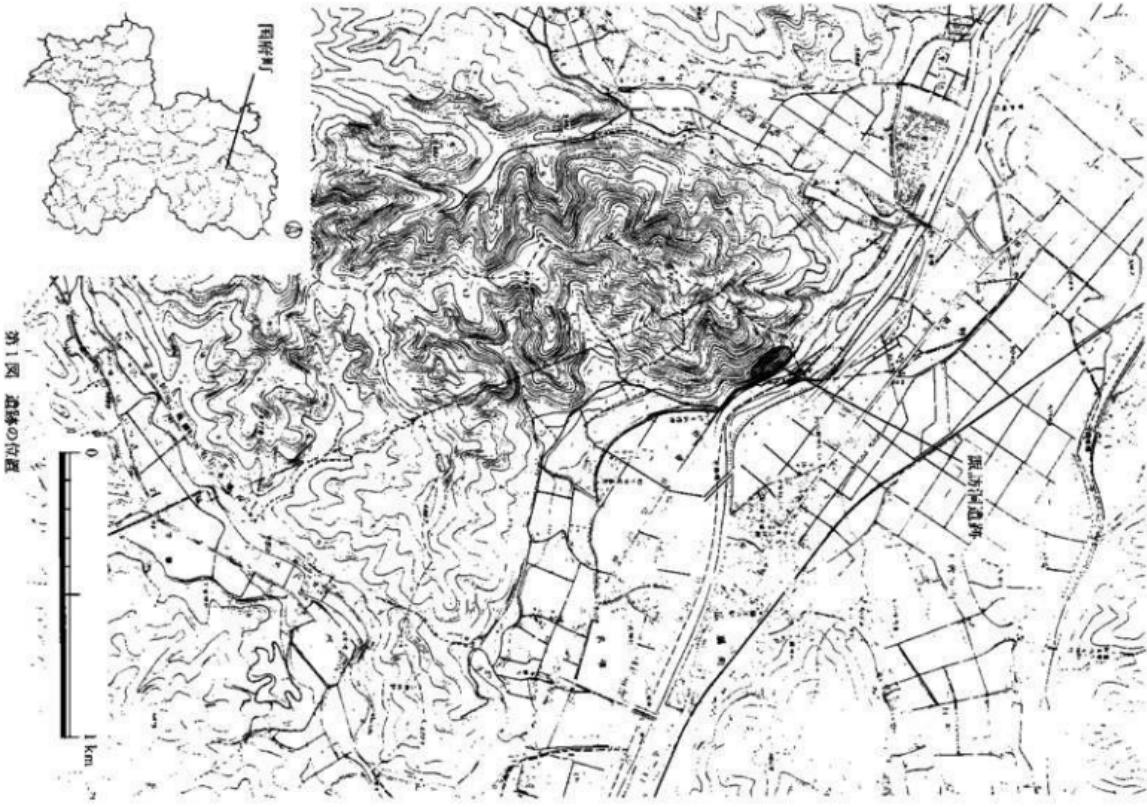
戦国期に入り、飛騨は、高原郷は江馬氏、古川盆地は姉小路氏、益田・大野郡方面は三木氏が支配していたが、上杉・武田・織田といった有力な戦国大名にまわりを取り囲まれていたため、複雑な情勢にあった。広瀬氏は、山崎城を居城としていたが、天文年間に広瀬左近将監利治が高堂城を築き、さらに広瀬城（田中城）に移ったとされる。

川中島の戦いの際には、江馬氏は武田方に、三木氏は上杉方に味方した。また、広瀬山城守宗城は、武田方に味方したといわれる。1564年に、武田の将山県昌景が江馬氏応援のため飛騨に攻め入り、千光寺を攻めた時に、江馬輝盛や広瀬宗城も武田方について戦っている。1576年には、上杉謙信が飛騨に兵を入れ、三木白綱や江馬輝盛を攻めている。この頃には、三木氏は織田方についていた。

三木白綱の父良頼の時には、三家に分かれていた姉小路氏の古河家を滅ぼし、自綱の代には、益田・大野・高山方面から吉城郡南部にかけて勢力を伸ばしていた。一方、飛騨北部の高原郷を支配していた江馬氏は、諏訪城（吉城郡神岡町）に居を構え、古川盆地への進出をめざしていた。1582年に江馬輝盛は、大坂峠を越え、梨打城（吉城郡国府町）付近に陣を張り、荒城川をはさんで三木勢との戦いを開戦した。この戦いで、江馬輝盛は討ち取られ、さらに、諏訪城も落とされ、江馬氏は滅亡した。輝盛の後を追った十三人の武将の墓にちなんで、大坂峠は十三墓峠と呼ばれている。一方、三木白綱は1583年に、広瀬宗城とともに小鷹利城の牛丸氏を攻め、さらに、広瀬宗城をも殺して、国府の広瀬郷・荒城郷も領有することになった。自綱は子の秀綱に後を継がせ松倉城主とし、自らは広瀬城に移った。

豊臣秀吉は、越中の佐々成政を討つとともに、越前大野の城主金森長近に命じて、飛騨の三木氏を攻めさせた。三木氏は、金森氏との戦いに破れ、松倉城も落とされた。広瀬宗城の子広瀬宗直は、かつて三木氏に滅ぼされた江馬氏・鍋山氏の残党とともに金森方について、三木氏と戦ったが、その後、金森氏に反抗して反乱をおこしたため、金森長近の子可重によって倒された。広瀬宗直は飛騨を逃れて、近江彦根藩主井伊家に仕官したともいわれる。

以上のように、国府町の中心部を支配していた広瀬氏は、中世飛騨の政治勢力の推移に密接に関係していた。



## 6 第2節 歴史的環境

第1表 周辺の城跡（岐阜県教育委員会『岐阜県遺跡地図』1990をもとに作成）

番号	遺跡名	所在地	地目	時代	遺跡の概況
1	小鷹利城跡	吉城郡古川町信包牛ヶ谷	山林	中世(室町)	県史跡 昭和34年11月16日指定
2	黒内城跡	吉城郡古川町黒内古屋敷	山林	中世(室町)	
3	野口城跡	吉城郡古川町野口宮ノ腰	山林	中世(室町)	県史跡 昭和34年6月24日指定
4	向小島城跡	吉城郡古川町信包森	山林	中世(室町)	県史跡 昭和34年11月16日指定
5	池之山城跡	吉城郡古川町下野池之山	山林	中世(室町)	
6	小島城跡	吉城郡古川町沼町前平	山林	中世(室町)	県史跡 昭和34年11月16日指定
7	下北城跡	吉城郡古川町下氣多城山	山林	中世(室町)	
8	落岩城跡	吉城郡古川町上野落岩	山林	中世(室町)	
9	増島城跡	吉城郡古川町片原町8	神社境内	安土桃山	県史跡 昭和34年11月16日指定
10	百足城跡	吉城郡古川町高野瀧ノ上	山林	中世(室町)	
11	古川城跡	吉城郡古川町高野城山	山林	中世(室町)	県史跡 昭和34年11月16日指定
12	諏訪洞城跡	吉城郡国府町名張諏訪洞	山林		
13	梨打城跡	吉城郡国府町八日町漆垣内梨打山	山林	中世(室町)	県史跡 昭和34年6月20日指定
14	白米城跡	吉城郡国府町蓑輪黒洞	山林	中世(室町)	
15	山崎城跡	吉城郡国府町広瀬町	山林	中世(室町)	
16	広瀬城跡	吉城郡国府町名張城山	山林	室町～安桃	県史跡 昭和34年8月11日指定
17	高堂城跡	吉城郡国府町瓜果かうと洞	山林	安土桃山	県史跡 昭和34年8月11日指定

国府・古川盆地には、第2図および第1表に示したように城跡が点在している。その概略について簡単に紹介する。以下、城名および所在地は、岐阜県教育委員会『岐阜県遺跡地図』(1990)を参照し、各城についての記述は、森本一雄『定本飛騨の城』(1987)より抜粋してまとめたものである。

### 小鷹利城

河合村福越および古川町信包・黒内にまたがる湯峯山の山上にある。東西16.3m、南北18.2mの本丸および本丸外曲輪と、二之丸（東西27.3m、南北18.2m）、三之丸（東西10.9m、南北45.1m）を南北に配し、三之丸下の西方に27.3mの切り通しがある。切り通しを越えて西方の山上に西之丸を設けている。

姉小路伊綱が敗死した「飛騨応永の乱」の後に、藤原師言が国司に任せられ、黒内城の西方に新城を築き、旧城を出丸とした。

### 黒内城

建武年間（1334～1336）の頃、姉小路宰相頼鑑が飛騨国司となり、ここに築城して、その居所を桜の御所と称した。後に、小島城に移り、ここは、家臣黒内越中守に預けて守らせたという。さらに、小鷹利城が築かれると、その出丸とされた。

### 野口城

東方は袈裟丸に接し、背後の山並みは神原峠方面の山々に連なる。西方は宮川を隔てて信包に対し、向小島城がある。古川盆地の西北端に位置する。

築城年代、城主ともに不明であるが、『飛騨遺秉合府』には、吉川左衛門尉がいたとしているが、出自も年代も不明。姉小路氏の属城であろう。繩張りの状況から見て室町末期のものと推定される。

約10m四方の本丸とその東北に二の丸、南に三の丸を形成する。西南の隅に登り口があって門址のような形状が見られる。

### 向小島城

築城年代、築城者とも不明ながら姉小路氏一族の居城で、天文以後の繩張りである。はじめ、現状の出丸が本丸で、小規模ながら腰曲輪や小平地、堀切があって小城郭を形成しており、後、東方山上へ本丸を移し、以下二・三の丸、腰曲輪を多數配して整備し、旧本丸を新城の出丸としたと考えられる。

天正13年（1584）金森長近父子に攻められて落城した。

### 池之山城

宮川の西方に連走する山の峰続きの中程に位置する。古色で素朴な縄張りで、本丸址と思われる山上平地と、西北方山麓から登る道に水の手となる谷川が流れている。

築城年代は不明であるが、一連の姉小路氏関係の城であろう。

### 小島城

旧小島郷杉崎・太江・沼町にまたがる大小二つの山の上に位置し、安峯山を頂点として西北方へ走る山脈の尾根の先端に築かれている。

扇形の本丸の南に物見台、曲輪を設け、北に二の丸、下っていくと、旧城の本丸と思われる三の丸がある。さらに北方には、腰曲輪や小平地を多く配し、西の腰に無数の舟型があり、杉崎地内に堀切がある。

### 下北城

小島城の尾根伝いに南へ連走する高峰の中央辺りに位置する。築城年代は未詳ながら小島城の属城で姉小路氏一族の持城の一つであろう。

自然の天險を利用して、荒削りで雄大な縄張りを持つ。山容そのままに各曲輪を五段に築き、やや東南の方角へ湾曲している。北端の平地が最高所で、順次南へ下降している。

### 落岩城

『定本飛騨の城』では、「鞍ヶ嶽城」となっている。山上に本丸があり、東西19m、南北19mのやや円形を呈する。6m下って二の丸、さらに三の丸とつづく。本丸の北および東に腰曲輪があり、空堀が三の丸の南にあり、小丘を距てて空堀があって、南の山との境界を切っている。南の山へ登る道に小平地、堀切が所々にあって、頂上はのろし台の址かと思われる。

### 増島城

山国飛騨では珍しい平城である。わずかに本丸の東南の一角に天主曲輪の址が残り、石垣は比較的の保存がよい。

城の建造物として残っているものとして、林昌寺と円光寺の山門があり、本光寺書院も城から移したものといわれている。

天正13(1585)年金森長近が三木自綱を討伐して、秀吉から飛騨一国を与えられ、古川城（蛤城）にいたが、天正15（1587）年頃増島に城を築き（一説天正16年着工）、長近は鍋山城（高山）へ入り養子可重を増島城に置いて、一万石を分知した。

### 百足城

垣内山城ともいう。最高所に物見矢倉台を構え、本丸、二の丸と階段状に曲輪を配置し、南から二の丸へ越す小山との間に空堀を造る。西方に堀切があって、本丸・二の丸の西方に多数の腰曲輪がある。

『斐太後風土記』に姉小路高綱は蛤城（古川城）に隠居して好風景を賞したと書いているが、百足城の間違いであろう。

### 古川城

蛤城または高野城ともいう。創築年代は未詳ながら、現状は天文以後天正頃の様式を示している。

山城で標高 629mの山上に本丸がある。搦手を登りつめた所に二の丸があり、本丸外曲輪を経て本丸に登る道は、急峻で、二の丸から外曲輪に至る南の角に、舟型の原形がある。本丸の東方下に出曲輪があり、南下に段丘となって連続する大小の平地があり、屋敷址と思われる。本丸外曲輪の北方に多く散乱する大小の石は本丸の石垣を崩したものようである。城の遺構は規模が雄大である。

蛤城の由来は、出曲輪にある蛤石による。二つあったが一つを何時の頃か雨乞いのため宮川へ沈めたという伝説がある。

### 梨打城

梨内城ともいう。荒城郷の北部中央辺りに位置する。対岸南に白米城（蓑輪城）がある。築城年代は推定天文頃。繩張りの整然としていることは江馬氏の持城といわれるもののうち最優秀のものである。本丸（東西27.3m、南北32.7m）の東に二の丸（東西72.7m、東辺14.5m、西辺16.3m）があり、西に出曲輪（東西27.3m、南北14.5m）がある。その西に長さ36mの空堀がある。本丸と出曲輪との間に大手道がある。また、周辺に舟型曲輪が多数ある。

### 白米城

蓑輪城ともいう。築城年代未詳ながら、推定は天文初期頃。本丸（東西13m、南北16m）、外曲輪（東西18m、南北24m）と多数の腰曲輪（舟型）からなる。いわゆる白米伝説が伝わっている。

### 山崎城

城のある山は、あゆみ山から南へ続く山系にあり、標高凡そ 620m。城は天陥であるが、規模は至って小さく、山の最頂部を削平して凡そ 180m<sup>2</sup>の広場を設けて本丸とし、北の腰に二の

丸に相当するやや大きい平地がある。本丸の腰東西・南の三方に小曲輪が散在する。空堀は中腹南北方に一條あって、数段の段丘があり、この付近が屋敷址かと思われる。

築城年代は未詳ながら鎌倉時代と推定する。この地の豪族広瀬氏の居城で天文頃広瀬左近将監利治はこの城より高堂城を築き、さらに広瀬城（田中城）を築いて移った。

天正13年8月、金森氏の飛騨侵攻に際して、元広瀬城主の広瀬宗直は金森氏の嚮導隊に加わり、旧城広瀬城を望んで山崎山に布陣したと伝える。

この城址には鉢貸伝説がある。いわゆる椀貸伝説と同系のものである。

### 広瀬城

山城ながら平山城に近い形式を備えている。飛騨では、高山城・松倉城に次ぐ繩張りの広大さを持つ。

本丸は東西38.3m、南北21.5m。東西の腰に多数の曲輪を配する。本丸西方の端に小曲輪が付属して、三の丸への帶曲輪との間に深い空堀がある。次に三の丸との間に長さ32.7mの帶曲輪がやや西方へ曲がっている。三の丸は、東西50m、南北8mの平地で、本丸に次ぐ高所であり、物見矢倉のあった位置のようである。西の下に小平地が三段にあって山麓へ下降する。南は多くの腰曲輪を配している。北方下に無数のタテ・ヨコの堀切がある。三の丸の東北下に三角形の平地があり、その下に馬つなぎ場である馬場の址がある。

二の丸は東西27.3m、南北13.6m。腰曲輪が西方から南・東へ鉢巻状に取巻いている。西よりの下に長さ凡そ80mの空堀がある。出丸は18.5m<sup>2</sup>のやや円形に近い平地である。二の丸の東・南の腰に無数の曲輪がある。本丸への登り口の道に沿って長さ10m、高さ4m程の石垣がある。

この城は、上城山と城ヶ洞の二つの山から成っているが、かつては上城山が本城であり、天正に入つて広瀬宗城の頃、本丸を城ヶ洞へ移し、上城山を南の丸又は二の丸としたのではないかと推定されている。

### 高堂城

広大な繩張りを持ち、天陥の山城である。山崎城から広瀬氏が移動築城したものと伝わる。築城年代は確実な資料を欠くが、様式から考察すれば天文（1532～1554）頃と推定される。

本丸は東西15.5m、南北33.5m。本丸を凡そ2m下つて東南に、本丸を半円に取巻く帶曲輪がある。東方凡そ4m下に腰曲輪が段丘となって下降する。本丸の北方凡そ3m下つて二の丸がある。南北に長い平地で、西方に腰曲輪があつて三段に構える。北方の先端に多数の舟型がある。本丸の南方凡そ300mを経て、幅凡そ3～4mの空堀があり、さらに南に登ると山上に凡そ160m<sup>2</sup>の平地があり、多数の腰曲輪を有する出丸となつている。

## 第2章 発掘調査の経過

### 第1節 調査の方法

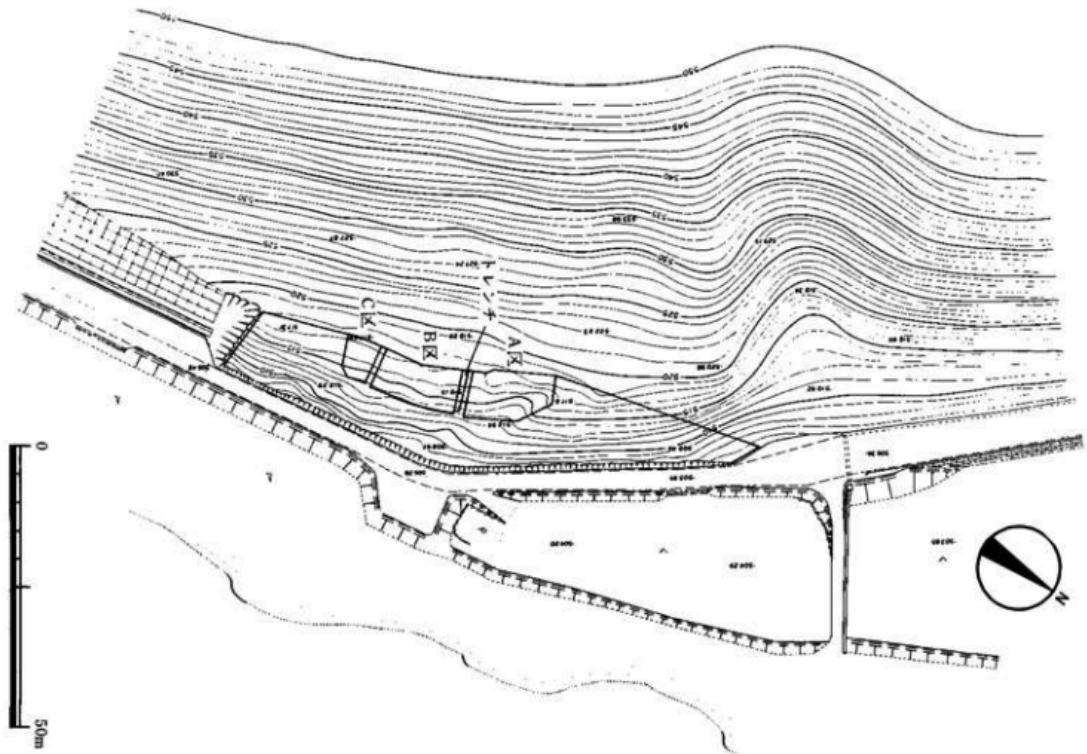
今回の発掘調査は、県単道路改良工事（谷高山線）予定地内における埋蔵文化財発掘調査である。平成5年度に発掘調査を実施することになったが、事業計画区域内についてはすでに伐採してあった。また、調査地点の南方は山麓から平地が広がる地点であり、すでに工事が終了していた。

まず、発掘調査前の写真撮影および地形測量を行い、また、除草作業も行って、現状を観察した。その結果、調査地点の中央部の山麓に、4段の平坦部が見られた。ただし最上段は、調査区外であった。また、斜めに上がる崖地が観察されたが、これは山頂へ登る道であった。

全面を掘削することは困難であり、また必要もなかったので、調査区の中央部を中心に掘削することとした。そして、排土の処理のために、土留め用の柵も設置した。

次に、東西方向つまり等高線に対して直角方向に、トレンチを1本入れて土層の観察を行った。さらに図示していないが、8mメッシュのグリッドの設定を行って遺物の出土地点をおさえた。掘削地点の南部にも、トレンチとは別に土層観察用の畦を1本残した。従って、トレンチと畦によって3か所の地点が設定された。ここでは、北からA区・B区・C区と呼ぶことにする。

つづいて、表土の掘削を行い、整地層の確認、遺構の検出を試みた。その結果、後述するように、A区では、石列遺構や配石遺構を検出した。B区からC区にかけては一部整地面より下層も掘削した。掘削終了後、遺構の実測およびセクションの実測を行った後、空中写真による測量を委託した。



第3図 篠訪洞跡踏査地区設定図



第4図 発掘調査前地形図

## 第2節 発掘調査の経過

7月上旬より、現地での準備および調査を開始し、8月上旬に空中写真撮影等を行って、現地での作業を終了した。以下、週ごとに調査経過の概要を記す。

第1週（7.6～7.9） 現場事務所を設置し、用具の搬入を行う。また、事前地形測量および写真撮影を行い、排土処理のための土留め柵を作る。8mグリッドを設定する。調査区中央のトレンチを掘削し、土層の観察を行った。表土層より、近現代の陶磁器片が出土した。

第2週（7.12～7.16） 雨天の日が続く。ただし、調査地点は日陰になるため、晴天時の作業は、夏季にもかかわらず、能率よく実施できた。2次堆積層および、いわゆる生活面より下層から縄文土器片および打製石斧が出土する。

第3週（7.19～7.23） A区で石列遺構を検出する。さらに、配石遺構も検出する。実測および写真撮影を行う。切り株の除去作業を実施。土留め柵の補強を行う。ひきつづき打製石斧が出土する。

第4週（7.26～7.30） トレンチおよび土層観察用の畦のセクション実測。掘削地点以北の調査を実施した。排土の処理を行う。

第5週（8.2～8.4） 掘削地点の仕上げ作業をして、空中写真撮影を実施し、現地での発掘作業を終了した。

現場事務所で1次整理作業を行い、その後、2次整理作業および報告書作成作業は、飛騨出張所にて行った。

## 第3章 遺構

### 第1節 基本的層序

トレンチの土層および畦の土層観察より、基本的な層序として、次の4層が設定される。

まず、第Ⅰ層は、表土であり、茶褐色の腐植土で、径約5mmの小礫や木根を含む。厚さは、約20cmである。近代の陶磁器類が出土した。第Ⅱ層は、黒褐色の腐植土であるがしまりがよい。第Ⅰ層と同じく径約5mmの小礫を含んでいる。厚さは約10~30cmである。縄文土器片および打製石斧が出土した。

第Ⅲ層は、整地層と思われ、3層からなる。Ⅲa層は、灰褐色の砂質土であり、径約1mmの小礫を含む。Ⅲb層は、黒褐色の砂質土でしまりがよい。第Ⅱ層より緻密である。Ⅲc層は、灰黄褐色の砂質土で、径約1mmの小礫を含む。

第Ⅳ層は、黒褐色の砂質土で、Ⅲb層より、さらに細粒である。厚さは約20cmである。縄文土器片および打製石斧が出土した。地山は、黄褐色の砂礫土で径1~2cmの礫を含んでいる。

### 第2節 遺構

曲輪的な平坦部が4か所確認され、その一部は、発掘によって整地作業をしていることが認められた。いずれも帯状の形態を示し、階段状に並んでいる。高い方より曲輪1~4とする。ただし、後述するように本遺跡は、はたして砦跡と認定できるか疑問な点も多く、ここでは、「曲輪的遺構」という把握をしておく。また、曲輪2では、石列遺構、配石遺構が検出された。

#### 曲輪1

最も高い地点にあり、標高は、520.5mである。約3m×約11m程度の広さである。ただしこの部分は、調査区外である。

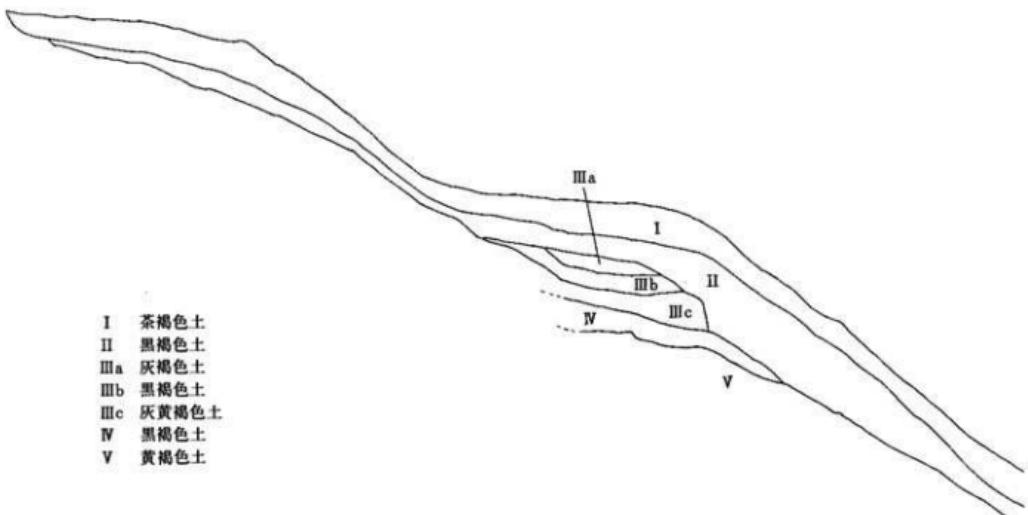
#### 曲輪2

曲輪1との比高差は、約2mである。約3m×約21mで、北よりの部分でやや屈曲している。調査区にかかるのは北西部のみである。ここでは、石列遺構と配石遺構を検出した。

#### 石列遺構

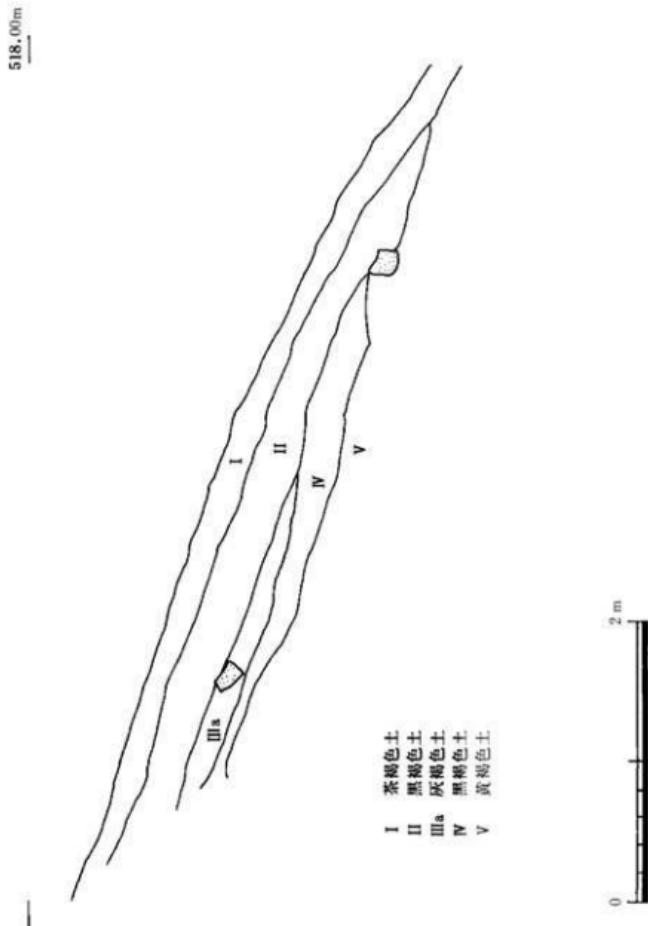
曲輪2の北端部に、第Ⅰ層・第Ⅱ層を除去した段階で、石列遺構を検出した。山石を幅約30

517.00m



第5図 トレンチ北壁土壠図

~60cm、長さ約3.5mにわたって配列したものである。途中石が抜けている箇所もある。また、石が下方にややずれている所もあった。石の大きさは、大きいもので、1辺が約30cm、小さいもので、1辺が約10cmのものである。石列の直下は傾斜が強く、土留め的な役割を果たすもの



第6図 C区北壁土層図

と考えられる。遺物は伴っていなかった。

#### 配石遺構

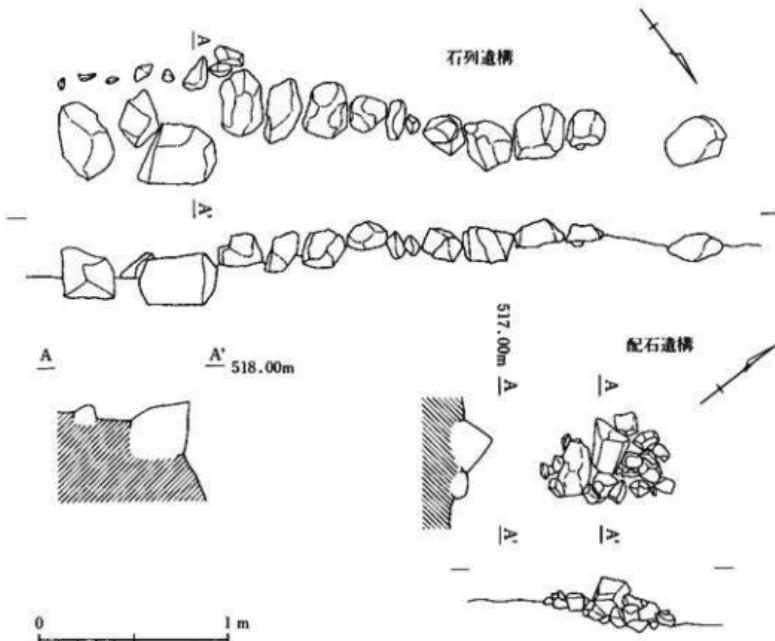
石列遺構の南東約3.5mの地点で同じく、曲輪2の第Ⅲ層上で、配石遺構を検出した。約50cm×約70cmの規模で、高さは約20cmである。径5cmから20cm程度の山石を組み合わせている。やはり、遺物は伴っていなかった。性格不明の遺構である。

#### 曲輪3

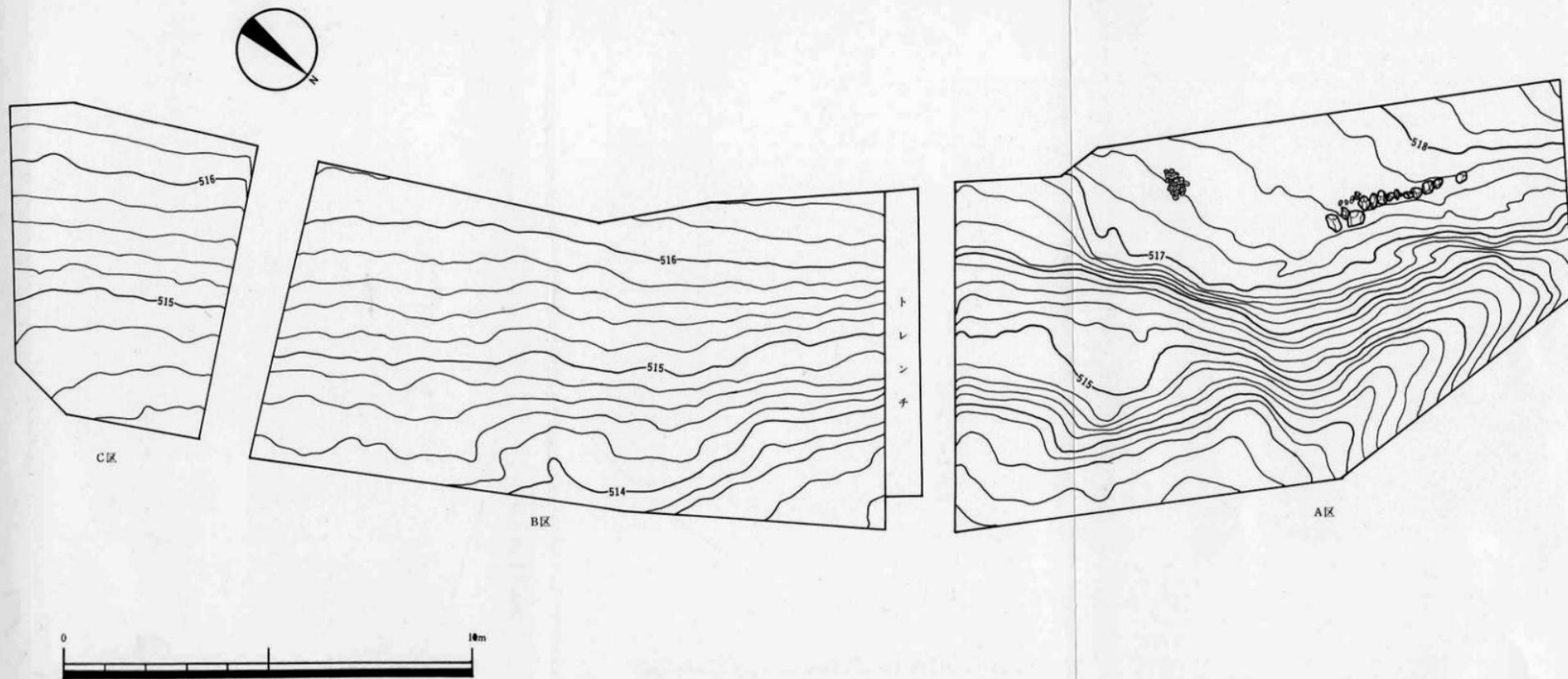
帯状に延びていて、曲輪4と段をなしている。約2m×約21mの広さで、曲輪2との比高差は約1mである。トレンチで観察した整地層が、この曲輪を形成している。

#### 曲輪4

約2m×約12m程度の広さである。曲輪3との比高差は、約1mである。



第7図 遺構図



第8图 発掘後地形図

## 第4章 遺 物

掘削地点の第Ⅰ層から、図示しなかったが、近現代の陶磁器片が5点出土した。第Ⅱ層および第Ⅳ層から土器片と打製石器が出土した。第Ⅲ層および遺構に伴う遺物はなく、岩跡と認定する有力な証拠となる遺物は検出できなかった。

### 第1節 土 器（第9図）

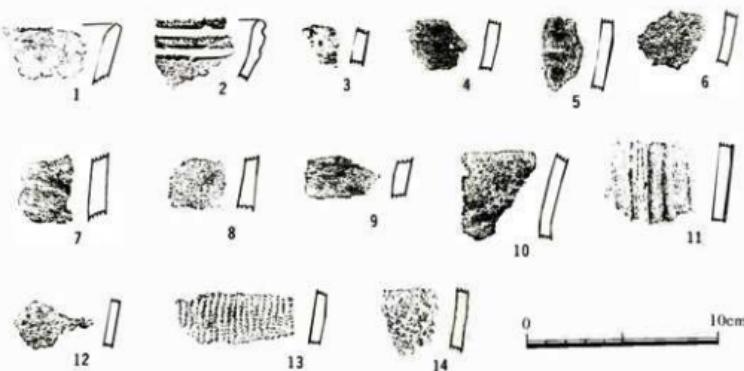
第Ⅱ層および、B区からC区にかけての第Ⅳ層から縄文土器片が15点出土した。口縁部が2点ある。1は、外反して開く口縁で、口縁端部が面取りされている。無文である。2は、直立て立ち上がる口縁で、2本の沈線が横走する。

11は、縦方向に細い隆起線文が施されている。13は、LRの縄文が施されている。その他は、すべて無文である。器厚は、約5mmから8mmのもので、主として縄文後期のものと考えられるが、中期のものもあるかもしれない。観察表を掲載しておく。

縄文土器以外としては、図示し難い細片であるが、須恵器と思われる小片が1点見つかっている。もし、須恵器の碗であるとすると、9～10世紀のものであろう<sup>1)</sup>。

[注]

1) 宇野隆夫氏（富山大学人文学部教授）のご教示を得た。



第9図 出土土器

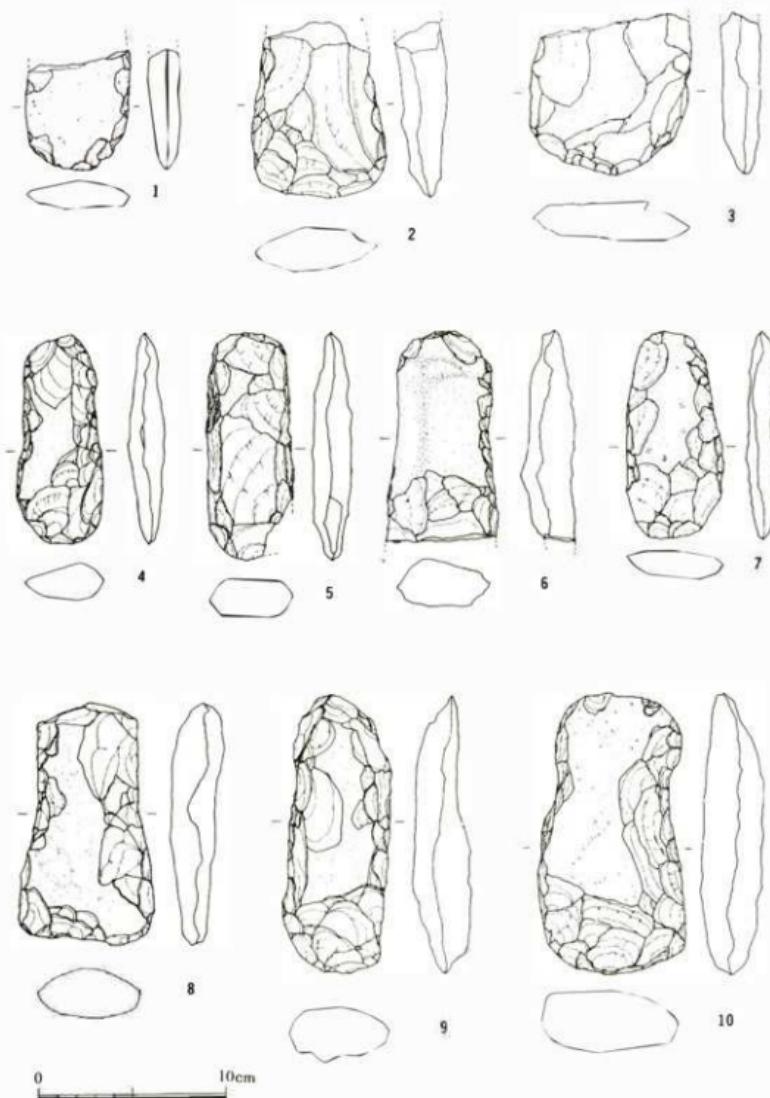
第2表 繩文土器観察表

出土区	層位	番号	外面文様調整	内部調整	胎 土	焼成	色 調	挿図番号	備 考
1 A区	II	3	無文・ナデ	ナデ	2~3mmの砂粒含む	不良	褐 色	9-7	
2 A区	II	5	無文・ナデ	ナデ	約1mmの砂粒含む	普通	明 褐 色	9-8	
3 B区	IV	6	無文・ナデ	ナデ	1~3mmの砂粒・雲母含む	普通	褐 色	9-1	口縁部
4 B区	IV	7	無文・ナデ	ナデ	約1mmの砂粒・雲母含む	普通	灰 黄 褐 色	9-4	
5 B区	IV	8	無文・ナデ	ナデ	1~3mmの砂粒・雲母含む	普通	にほい黄褐色	9-10	
6 B区	IV	9	無文・ナデ	ナデ	約1mmの砂粒含む	普通	にほい黄褐色	9-5	
7 B区	IV	10	無文・ナデ	ナデ	1~3mmの砂粒・雲母含む	普通	にほい黄褐色	9-12	
8 B区	IV	13	無文・ナデ	ナデ	1~2mmの砂粒・雲母含む	普通	にほい黄褐色		
9 B区	IV	15	無文・ナデ	ナデ	1~2mmの砂粒・雲母含む	普通	黒 褐 色	9-6	
10 A区	IV	16	繩 文	ナデ	約1mmの砂粒含む	普通	褐 色	9-13	
11 A区	II	19	沈線・ナデ	ナデ	1~3mmの砂粒・雲母含む	普通	褐 色	9-2	口縁部
12 B区	II	20	無文・ナデ	ナデ	1~2mmの砂粒含む	普通	褐 灰 色	9-9	
13 B区	II	21	無文・ナデ	ナデ	約1mmの砂粒含む	普通	褐 色	9-3	
14 B区	II	23	隆起線・ナデ	ナデ	1~2mmの砂粒多い	普通	にほい黄褐色	9-11	
15 A区	II	25	無文・不明	ナデ	石英含む	普通	明 褐 色	9-14	

## 第2節 石 器 (第10回)

出土した石器は、打製石斧のみである。完形品が5点、一部欠損が2点、約2分の1欠損が3点の計10点である。石材は、凝灰岩・緑色片岩・濃飛流紋岩・砂質片岩からなる。形態は、一般に短冊形・楕形・分鋼形に大別されるが、ここでは、8のみが楕形と言えそうであるが、他はすべて短冊形である。

調査地点の背後は、そのまま山頂につながる傾斜地であり、付近に繩文時代の集落が立地しそうな地点は見あたらない。土掘り具と考えられる打製石斧が比較的まとまって出土したという点から、根菜類などの食料採集の場であったことが想定される。



第10図 出土石器

第3表 打製石斧一覧表（単位はcmとg）

	出土区	層位	番号	長さ	幅	厚さ	重さ	分類	石 材	挿図番号	備 考
1	A区	II	1	11.3	4.5	1.6	105.1	短圓形	凝灰岩	10-4	
2	A区	II	2	(12.3)	(4.4)	(1.9)	(161.2)	短圓形	綠色片岩	10-5	
3	A区	II	4	(6.4)	(5.5)	(1.5)	(76.4)	短圓形	凝灰岩	10-1	
4	B区	II	12	13.1	7.4	2.5	322.5	撥形	凝灰岩	10-8	
5	A区	?	17	(11.3)	(4.9)	(2.8)	(233.4)	短圓形	凝灰岩	10-6	
6	A区	II	18	15.0	5.6	3.1	338.6	短圓形	硬質片岩	10-9	
7	B区	II	22	11.1	5.1	1.4	111.6	短圓形	濃飛流紋岩	10-7	
8	B区	II	26	(9.4)	(6.5)	(2.6)	(210.2)	短圓形	凝灰岩	10-2	
9	C区	IV	27	(8.6)	(8.3)	(2.2)	(224.6)	短圓形	綠色片岩	10-3	
10	B区	II	29	15.1	7.2	3.4	532.2	短圓形	凝灰岩	10-10	

## 第5章 まとめ

今回の発掘調査の結果を整理し、まとめとしたい。

遺跡の所在地は、吉城郡府町名張地区から同町宇津江地区へ抜ける地域であり、宮川と大平山の山裾に挟まれた所である。実際、県道谷高山線もここでは非常に狭く通行に支障をきたす所であった。また、遺跡に立つと国府・古川盆地が一望に見渡せ、広瀬城方面の見通しもきく所である。従って、この地は、広瀬城の城下を守るには好都合の場所であろう。

遺構に関しては、整地作業を施したと思われる「曲輪的遺構」が4か所確認された。あとは、上留め的な役割を果たすと思われる石列遺構や性格不明の配石遺構が検出されたのみであり、建物跡は確認できなかった。

遺物に関しては、その主なものは、縄文土器片15点と打製石斧10点であり、中近世のものは確認できなかった。縄文時代の生活の痕跡が認められたものの、中世の砦跡を決定づける資料には恵まれなかった。

従って今回の発掘調査の成果をまとめると、次の2点になる。

- (1) 確認された遺構・遺物の状況では、中世の砦跡を決定づける証拠は確認されなかつたが、何らかの施設が整備されたことが想定できる。
- (2) もし仮に砦跡とすると、非常に小規模なものであり、當時滞在したものではなかつたと推定される。

### 引用・参考文献

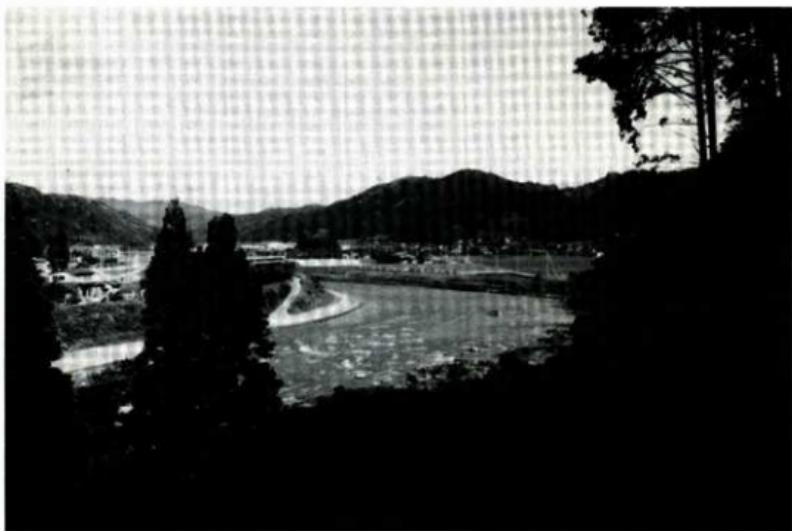
岡村守彦	1979『飛驒史考』中世編
「角川日本地名大辞典」編纂委員会	1980『角川日本地名大辞典』21 岐阜県
岐阜県教育委員会	1990『岐阜県遺跡地図』
国府町教育委員会	1989『飛驒の国府 歴史編』
千田嘉博・小島道裕・前川一要	1993『城館調査ハンドブック』
森本一雄	1987『定本飛驒の城』
吉城郡国府村史編纂委員会	1949『国府村史』



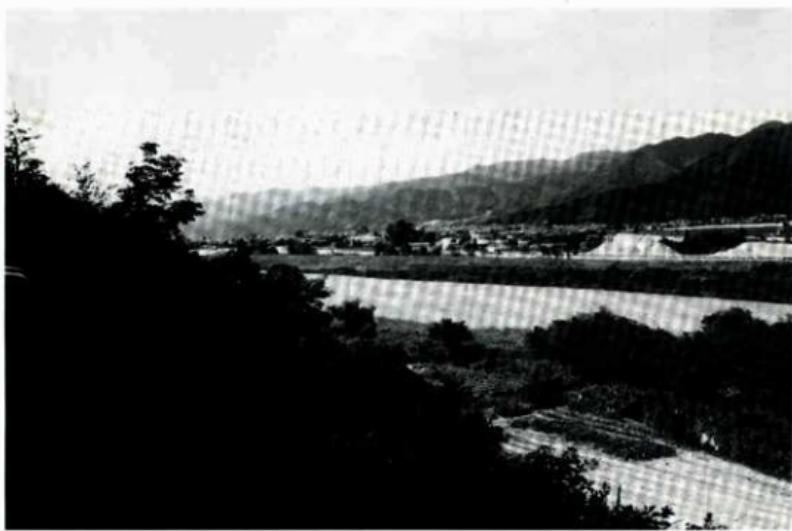
1. 遺跡遠景



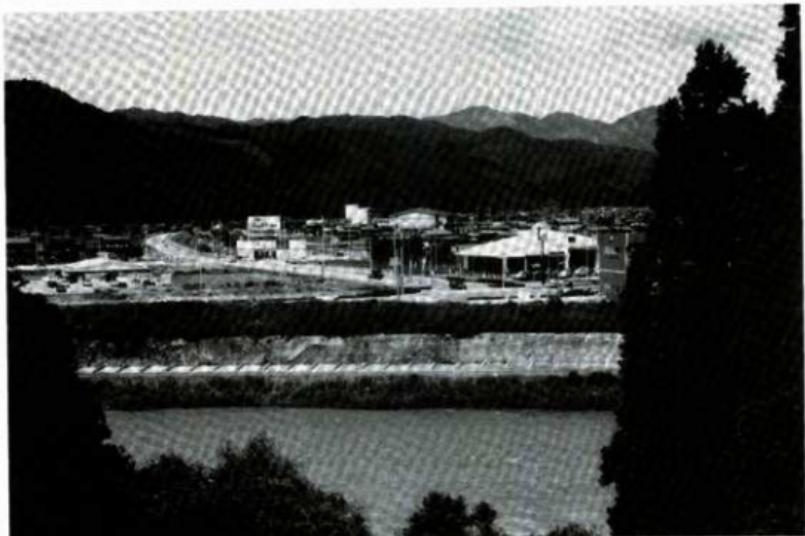
2. 発掘前の状況



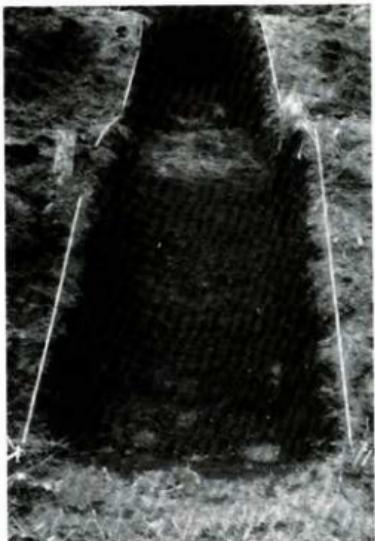
1. 遺跡からの眺望（南東、広瀬城を望む）



2. 遺跡からの眺望（北、古川方面）



1. 遺跡からの眺望（東方）



2. トレンチ



3. 作業風景



1. トレンチ北壁



2. C区北壁



1. 石列遺構（上から）



2. 石列遺構（北から）



1. 配石造構（南から）



2. 配石造構（上から）



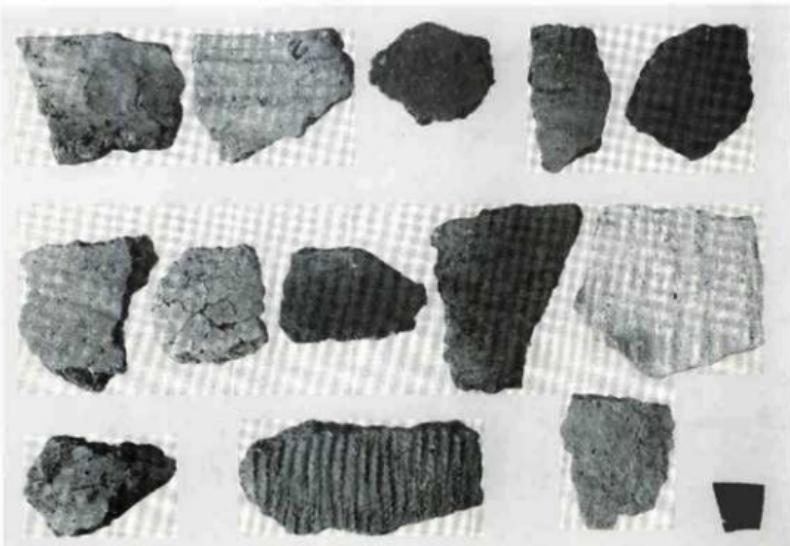
1. 発掘後の状況（遠景）



2. 発掘後の状況（南から）



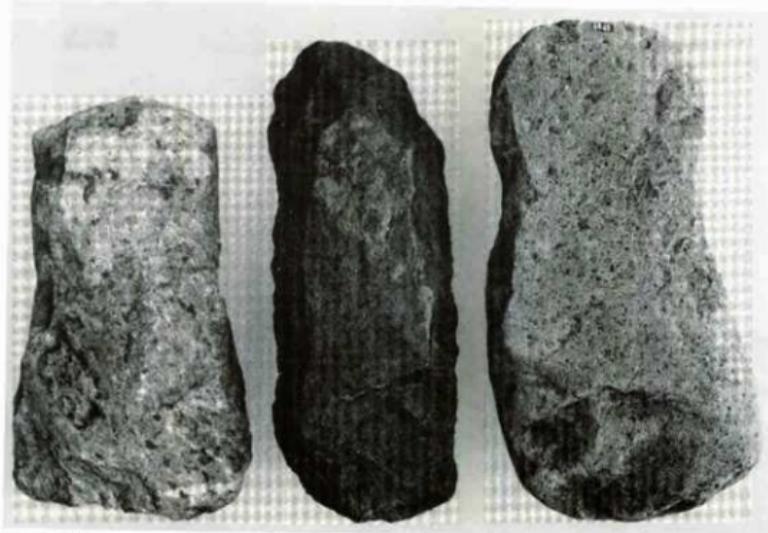
1. 発掘後の状況（北西から）



2. 土器



1. 石器 (1)



2. 石器 (2)

### 文献データシート

書名	岐阜県文化財保護センター調査報告書 第17集 諏訪洞砦跡
執筆者	上嶋善治 古田靖志
発行所	財團法人 岐阜県文化財保護センター
発行年月	1994年3月
遺跡名	諏訪洞砦跡
説み	すわばらとりであと
所在地	岐阜県吉城郡関ケ原町名張字諏訪洞
調査原因	県単道路改良工事（谷高山線）
種別	砦跡・散布地
時代	中世・繩文

岐阜県文化財保護センター 第17集

## 諏訪洞砦跡

1994年3月25日 印刷

1994年3月31日 刊行

編集・発行 岐阜県本巣郡祐積町牛牧宮下395  
財團法人 岐阜県文化財保護センター

印 刷 高 山 市 ・ 大 進 社